

福田徳三と堺利彦をめぐる

The Study of Tokuzo Fukuda and Toshihiko Sakai

金 沢 幾 子

図書館学課程非常勤講師

抄録：

明治・大正・昭和初期の近代経済学者、社会政策学者、また大正デモクラシーの先駆者である福田徳三博士は、カール・マルクスの『資本論』（*Das Kapital*）を原文で読んだことで知られ、当時の堺利彦ら社会主義者たちは、福田の言論を批判してはいたが、敬意を表していた。

一方、福田は、社会主義、共産主義には反対するものの、その主義者の活動には常に関心を持ち、一種のシンパシーを持っていた。

本稿は、福田博士と堺利彦を中心に、幸徳秋水、高島素之、大杉榮などの係わりをとりあげた。

Summary：

Dr. Tokuzo Fukuda was a scholar of economics and social policy, as well as a pioneer of Taisho Democracy. He read *Capital (Das Kapital)* by Karl Marx in German. In those days nobody read it in original language. So Toshihiko Sakai and other socialists respected Dr. Fukuda, though they criticized his opinion. Fukuda opposed to the socialism and the Marxism, but he had a certain measure of sympathy for socialists, especially Toshihiko Sakai.

キーワード：福田徳三、堺利彦、幸徳秋水、山川均、荒畑寒村、高島素之、大杉榮、大庭柯公、
売文社

Key Words：Tokuzo Fukuda, Toshihiko Sakai, Shusui Kotoku, Hitoshi Yamakawa, Kanson Arahata, Motoyuki Takabatake, Sakae Osugi, Kako Oba, Baibunsha

1. はじめに

福田徳三博士（1874-1930）は、1905（明治38）年東京高等商業学校休職中、マルクスの『資本論』（*Das Kapital*）全編を原文で通読した¹⁾。堺利彦ら社会主義者たちは、福田の言論を批判し

てはいたが敬意を持っていた。それは井上琢智が指摘するように、“近代経済学研究とほぼ並行して行われた福田のマルクス研究は、堺利彦、山川均、幸徳秋水が取り組んだように、アメリカにおけるマルクス研究に基づくものではなく、マルクス原典による本格的なものであった”（『黎明期日本の経済思想』日本評論社 2006 317頁）からである。

福田は経済政策、社会政策を研究するものとして、「人間解放」を理想とする社会主義やマルクス主義には共感するが、その歴史的必然認識やプロレタリア独裁の非民主的性格などは受け容れられなかった。しかし、その活動には関心を寄せ、1907（明治40）年、幸徳秋水²⁾や堺利彦が『日刊平民新聞』を発行した折には、ドイツの恩師ブレンターノ³⁾にその切り抜き⁴⁾を送った。また、福田宅を訪れた小泉信三⁵⁾は、幸徳秋水の『基督抹殺論』が複数置かれていて、本の収益が死刑に遭った人の何かになるように余分に買っているのだと聞かされた⁶⁾。

福田は社会を改良する意図をもって、社会政策学会⁷⁾において盛んに活動する一方、米騒動においては生存権⁸⁾や極窮権を主張し、権力や言論の弾圧に抗し、シベリア出兵⁹⁾や帝国主義・覇権主義¹⁰⁾に反対した。また、世界の平和と人権やデモクラシーを尊重する社会を目指して、黎明会¹¹⁾を興した。関東大震災後は人間復興の経済¹²⁾を目指し、労働運動を支持した。

福田の死去に際し、政府が叙勲にあたって社会主義者であるかが取り上げられた。“当時相当のインテリではあるけれども、学問からちょっと離れている人にとっては、福田先生というのは非常にわからない。ある場合には非常に社会主義者のように見えるし、ある場合には資本主義者のようにも見える、どっちなんだということが問題になった”という中山伊知郎の指摘¹³⁾は、いみじくも世間の福田に対する見方を表わす。

2. 堺利彦（1870-1933）と福田の出会いまで

堺は一高中退後、英語教師や新聞記者をへて、1899（明治32）年『万朝報』の朝報社¹⁴⁾へ入り、幸徳秋水、内村鑑三と知り合う。1901（同34）年頃から社会主義者となり、1903年日露戦争が切迫すると幸徳、内村とともに非戦論を展開、退社後は幸徳と共に平民社を設立し、『週刊平民新聞』¹⁵⁾を創刊（M36.11.15）した。また、『家庭雑誌』（M36.4 発刊、M39.9 大杉、伊藤野枝に譲る）を刊行、マルクス、エンゲルス共著の『共産党宣言』の翻訳（M37.11）、月刊『社会主義研究』（M39.3）の発行などを行って社会主義運動につとめた。

1908（明治41）年1月、堺らの組織する金曜会例会の解散命令に抗し、平民社楼上から演説したいいわゆる屋上演説事件によって、堺は山川均¹⁶⁾、大杉榮らと共に禁錮1カ月の刑に処せられた。さらに夏には大杉、荒畑寒村らが引き起した赤旗事件に連坐して入獄、そのため幸徳秋水を死刑に至らしめた1910（同43）年の大逆事件の難を逃れた。

寒村はいう、“同[明治43]年の秋に先生[堺]が満期出獄した時は同志は概むね投獄せられ、僅かに羅織を免れた者も家を逐はれ、職を奪はれて悉く離散し、運動はまったく火の消えたやうな状態に在つた。此の四面楚歌の声とも称すべき迫害裡に先生が始めたのが「売文社」¹⁷⁾であつた”¹⁸⁾。堺は大逆事件で処刑された人たちの遺体の引き取り、葬儀、遺品の扱いなどを一身に引き受け、また遺族たちを慰め励ます旅にも出た¹⁹⁾。

大正期に入り、堺は売文社から雑誌『へちまの花』(T3.1-T4.9)、『新社会』(T4.9-T9.1)を発行した。売文社は生計を立てるよすがでもあり、弾圧下の同志を支え、堺をたよる若い同志たちの教育の場でもあった。警察の監視が絶えず付きまとった大逆事件後の〈冬の時代〉に、“社会主義の灯がかろうじて維持され、第一次大戦後、労働者階級のかかげる炬火にひきつがれたのは、この堺の人間の資質によるところが大きかった”²⁰⁾。

福田は、日露戦争非戦論あたりから堺に注目していたであろうが、実際に会ったのは慶応義塾理財学会での堺の講演会であった。堺も「福田時代から河上時代」(『改造』1(9):T8.12)において、“十数年も前に私を慶応義塾に引張り出して講演をさせて呉れた事もあつた”²¹⁾と、講演の企画が福田から出たことを示唆し、社会主義についての講演内容は、福田に“大体科学的基礎の上に立って居るものと認めて貰った”²²⁾という。講演の帰り道に、福田は堺と同じ電車に乗り、もし自分が新聞記者だったら、社会主義者になっていたかもしれない、その代り、堺がどこかの学校を卒業していたら社会主義者にはならなかったかもしれないと言い、堺も同意した²³⁾。

現時点ではその年月日は確定できていない。福田は1905(明治38)年5月慶応義塾に移り、同大学政治科、理財科教授になったのは翌年4月、講演会は堺の入獄(同41年)以前である。1907(同40)年2月、福田は『日刊平民新聞』初号の切り抜きをプレナーノに送り、また翌月には、「難解なるカール・マルクス」を『東京経済雑誌』第1381号に掲載した²⁴⁾。『共産党宣言』翻訳²⁵⁾の故に訳者が罪に問われた事件などに対し、健全なる社会思想の発達のため、警告を発する意図から執筆したという。こうした事情を勘案すると、堺の講演は早くて1906(明治39年)か、翌明治40年あたりの可能性が高いのではないと思われる。

3. 幸徳秋水(1871-1911)と福田

『週刊平民新聞』創刊号9頁に、作家伊藤銀月は堺と幸徳について、「枯川と秋水」と題する人物評を載せた。“秋水はヒネ生姜の如く、枯川はシン甘藷に似たり。枯川の文は大根河岸の晨の如し、曰く清新。秋水の文は魚河岸の夕べに似たり、曰く尖新。……秋水の文は猫の喧嘩を聞くが如し、凄くして且つ面白し。枯川の文は鶏の蹴合を見るに似たり、凄からずして偏に面白し。”

“枯川の社会主義は趣味七分に理論三分、秋水の社会主義は理論六分に趣味四分。此厳密なる数字的差異、恐らく両者自身も未だ算し到らじ 枯川の文を解剖すれば、洋文素四、和文素四、漢文素二、併せて十。秋水の文を解剖すれば、洋文素四、漢文素四、和文素二、併せて十……秋水を社会主義の団子に円(まる)める人にして枯川は其餡を煮る人也”云々。『パンとペン』の著者・黒岩比佐子は、伊藤の洒脱な文の末尾、“秋水と共に人を殺し人を活かすことを謀るべく、枯川と共に人を医し人を育することを謀るべし”が、数年後に秋水が大逆事件で処刑され、堺はその遺族を慰安して回り、売文社で若い社会主義者を育てていくことを、まるで予言しているかのようだと指摘する(同書117頁)。

福田は幸徳秋水とは直接の面識はなかったであろう。筆者が知るところは、1911(明治44)年1月15日、大審院が大逆事件被告24名に死刑判決を下した号外を見て、自分は社会主義者に知己が多いと思っていたが、今度の顔触れの中には一向知らないものが多いと言った(『現代の経

濟』2：S12.12 経済学座談会における高橋誠一郎発言²²⁾。幸徳が獄中で脱筆し、処刑後2月1日に発売された『基督抹殺論』を支援のために複数購入。東京高等商業学校において「これキリストを抹殺するならず、その衣をかりて天皇を抹殺せんと試みたる也」と言った(木村毅『丸善百年史』上S55 708頁)。また、『田口卯吉全集』第2巻「文明史及社会論」解説(S2.7)を「文明史家としての田口鼎軒先生」として、東京商科大学の『商学研究』第7巻1号(S2.10)に転載したが、引用参考書にあげたHenry Thomas Buckle著 *Introduction to the History of Civilization in England* について、「本篇起稿後、私は故幸徳秋水氏蔵書(『大逆文庫』²⁶⁾ 在印)を手に入れることが出来た。其れは米国版の三冊本であつて、監獄差入表が貼付してある。秋水氏は其最後の日に於いて猶ほ此書を愛読せられつつあつたものと見へる」と記したことのみである。

4. 堺の『売文集』

1912(明治45)年5月5日、堺は『売文集』²⁷⁾を高嶋米峰の丙午出版社より発行したが、それに先だつ1月に、当時の文筆家たちに‘巻頭の飾’²⁸⁾を依頼した²⁹⁾。

『売文集』序文には、出獄前に生計のために売文社を思い付き、営業種目として、1)原稿製作、2)外国語の和訳、3)和文の外国語訳、4)演説、講義、談話等の筆記、5)趣意書、意見書など、その他一切文章の立案、代作、及び添削をあげ、それでも生計が立ちかね、本を出してみる、その第三弾目として“売文社だから売文集を出すに不思議は無いが、それにしても今度は一つ、何とか少し面白く景気を附けて売り出したいものだと色々考へた末に思ひついた”のが‘巻頭の飾’である旨を記している。

『堺利彦全集』6(中央公論社S8)は『売文集』の摘録を取録し、三宅雪嶺をはじめ、福田、小川芋銭、上司小剣、小泉策太郎、秋田清、花井卓蔵、白川鯉洋、杉村楚人冠、堀紫山、加藤時次郎、伊藤痴遊、片山潜、安部磯雄、野依秀一、今村力三郎、島中翠湖、白柳秀湖の‘巻頭の飾’を部分掲載した。1970刊の法律文化社版もこれを踏襲する。その中で売文業に対する批評として、堺自身を最も満足させたという島中翠湖の言葉を引いてみる。

“酒々として物に拘泥せざる恬淡の一面と敢然としてあくまで我意を貫こうとする剛情の一面と、この両側の性格をいささかの矛盾なしに發揮するということはちょっと不思議に思われる。……しかも堺さんには何の不思議もなく、一挙一動の中にもこの相反せる二種の性格が現われている。……『売文』という命名の中には明らかにこの種の(普通の)社会的感情に反抗した剛情の意義がある。かと思えばまた、不用意に事実を事実としてあえて売文の徒をもって自ら甘んじ、世間の思わくも何も明らかに馬鹿にして掛かったような一面洒落の意義がある。……『売文集』はすなわち現代の風刺である。”(『堺利彦全集』6 法律文化社 220-221頁)

福田は「識らざる神」と題して、以下のような短文を載せた。

『われ途を行くとき爾曹が敬拜ふところの者を見しに識ざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり』(使徒行伝十七章二十三節)とは聖保羅がアレオパグス山上に立ちてアテナイ人に告げし所、今堺君は『見ざる売文集』に序を寄せよと命ぜらる。予が堺君に会せしは慶応義塾の理財学会に君が講演の為に来られし時唯一回あるのみ。君は予に取りて『識らざる神』に

して、売文集は『識らざる神にと刻書し祭壇』なり。然れども予はアテナイ人たることを耻とせず。『故に爾曹が識らずして敬ふ此者を我なんぢらに示さん』と言ひし保羅は、また『我は福音を耻とせず』と叫びし同じ保羅にあらずや。(西川光次郎氏著『心懐語』新渡戸農法博士序文参考)

此言を以て著者の命に応ず。果たして『読者を釣るの餌』たり得るや否や。」

福田は教会にこそ出向かなかったが、『聖書』を読み続けていた。のちに労農党の解散と河上肇の京大解職に関し、当局を批判した有名な「笛吹かざるに踊る」(『東京朝日新聞』S3.4.24-25)は、『新約聖書』マタイ伝 11 章の「笛吹けど踊らず」をもじった題であるが、堺と未だ見ざる『売文集』に『新約』使徒行伝のパウロの言を引いてくるなど、そのインスピレーション、卓越したセンスには驚くばかりである。菊池城司は、“これは堺に対する最大限の賛辞ではないだろうか。”³⁰⁾と評す。

『売文集』が世に出てからほどなく、神田宝亭において発行記念会が開かれ、福田は三宅雪嶺などと共に出席した³¹⁾。

5. 雑誌『新社会』の発行をめぐる

堺は 1914 (大正 3) 年に、文芸的娯楽物に社会主義的色彩を込めた営業機関誌『へちまの花』を創刊し、翌年 9 月に廃刊。その継続誌として社会主義機関誌『新社会』³²⁾を発行した。そのほぼ同時期、新社会社から慶応義塾大学教授・林毅陸 (1872-1950) を主筆として、同名の雑誌が創刊された。

堺は“私の『新社会』と同時に林毅陸君の『新社会』が出た。私のは見すほらしいもの、林君のは堂々たるもの、固より比べ物にはならぬが、それでも多少のお目ざはりになるとお気の毒に存じて居ります”³³⁾と述べ、福田が林主筆の『新社会』に稿した「『新社会』に寄せて新意義の新社会を論ず」³⁴⁾にふれて、“福田君の所論は全然我々の立場と同じである”。福田が「林君等の創めたる『新社会』が有名無実なる身体財産の保護を廃して、代はるに名実相具ふる生活の安固を以て根本原則とする新社会の如き意味にての新社会を鼓吹するものなりや」と論及した点に、“林君は確かに一本福田君から参られている。然し福田君の主張は独逸流の社会政策に在るので、其点に於て勿論我々と違ふ。”と、堺一流の皮肉を込めて、自らの立場を鮮明にした。

大杉榮も荒畑寒村と発行した雑誌『近代思想』において、「二種の個人的自由：福田博士の新社会論を読む」³⁵⁾を掲載した。

6. 福田の黎明会活動前後

1917 (大正 6) 年 9 月、鮭鱒漁業の堤清六 (1880-1931) が出資、内藤民治 (1885-1965) 主幹の『中外』が世に出、福田も堺らも、当時のいずれも一家見を有す一流知名の士の集う創刊記念祝宴に出席した³⁶⁾。この『中外』の原稿のかなりの部分は売文社で供給し、創刊後ある時期の間は、編集主任の署名のものは堺が、主幹の署名のものは山川が執筆していたという³⁷⁾。翌年、堤は薩摩次郎助の駿河台旧屋敷を買い上げ、「あけぼの会」として月に 2・3 回講演会を催し、講師に

福田、田中玉堂、田中萃一郎、堺、山川、荒畑、高島らを招いた。堺は、“大正の半頃、内藤民治君が雑誌『中外』をだして新思想の魁をした時、私は又それを機縁として多少福田君と接触した。福田君の侠気と野次性はこの新雑誌に対して、少なからぬ希望を寄せざるを得なかつた。私は当時、「売文社々長」として内藤君の帷幕中に在る形であつた”と回想する³⁸⁾。“従来一雑誌『中外』との関係以来一社会主義者との不離不即的の交誼が浅からぬ……”³⁹⁾と書かれ、堺が“……二、三年来、私は初めて福田君と少し心やすく交際した”⁴⁰⁾というのはこの時期のことであろうが、その多少の接触がいかなるものであったかは、具体的にはわからない。

1918(大正7)年12月から翌年にかけて、福田は吉野作造(1878-1933)と共に、一、日本の国本を学理的に闡明し、世界人文の発達に於ける日本の使命を發揮する、二、世界の大勢に逆行する危険なる頑迷思想を撲滅する、三、戦後世界の趨勢に順応し、国民生活の安固充実を促進することを大綱に掲げ、日本にデモクラシーを普及する黎明会¹¹⁾を立ち上げた。以後、福田は同会が解散するまでその講演に奔走した。吉野は、堺利彦のようなマルクス主義者が会員となることをきっぱりと拒否し、高島素之も福田を介して加入を申し込んだが、黎明会会員多数の反対により断られた⁴¹⁾。

1919(同8)年3月初めの頃、大鏡閣支配人・面家壮吉の世話で、上野の伊藤松坂屋裏テンプラ屋清新において‘鰻のテンプラ会’なる会合が催され、福田、吉野、宮武外骨、堺などが参加した。これは高島が黎明会入会を断られて、逆に保守反動の国家社会主義の道へ走ったことを揶揄した福田の廻文⁴²⁾がきっかけであろう。正統派マルクス主義の立場を守って、同志として共に活動していた高島と袂を分かち、売文社の共同経営も解消するに至った堺は、福田らの話しを聞きながら如何なる心持であったであろう。

7. 雑誌『解放』創刊をめぐる

その3月、面家壮吉は箱根滞在中の福田を訪問し、新しく創刊する雑誌『解放』への毎号執筆を懇願したが福田は応じなかった。しかし、面家は福田の千駄ヶ谷宅に三顧の礼をとり、大庭柯公⁴³⁾を通じて再度依頼した。その折、“ふと話題になった『資本論』の翻訳の話になると、[福田は]大いに乗り気になり、金は一文も貰わなくてよいから、自分が責任を持って全巻を監修するという、大へんな意気込みを示した。話は進展し、『資本論』のみならず、他の主要著作とあわせた『マルクス全集』の企画となっていた。この段階で堺が『資本論』の翻訳者に高島を加えることを推薦した”⁴⁴⁾。また、面家が新雑誌には堺、山川にも毎号執筆を依頼する旨を伝えたと、福田は執筆を了承し、かつ、その雑誌では福田が主筆、堺は編集長、中目尚義(当時『中外』主筆、黎明会会員)を編集次長とする案を示した。翌日、大庭の仲立ちで面家、堺、福田は契約書に記名調印した。しかるに中一日において、福田は『解放』の件を一方向的に破棄、その責任を堺に転嫁し、両者の関係は破綻した。

ことのおおよそは、大庭柯公が『日本及日本人』に掲載した「福田徳三論」および「『福田徳三論』について」による。これに対し、福田にはその筋の圧力があつたとか、堺が福田の悪罵を受けたのはそれなりの理由があつたからとか取り沙汰されたが、その真相は未だ不明である⁴⁵⁾。

一方、『夢の世界』第2巻6月号(T8.6.1)に田中鼎一の「筆禍料五十万円也」‘政教社の新聞計画失敗 朝日新聞後日物語’という一種のゴシップ記事が掲載された。左右田銀行を後ろ盾にもつ左右田喜一郎(1881-1927)が新聞発行の意向をもち、三宅雪嶺を尊敬していたので、雪嶺を主筆とする政教社の一団と、朝日新聞の白虹事件に連坐・退社した大庭らを糾合する話が進み、佐藤出版部と宮武外骨(1867-1955)が左右田の師かつ顧問役の福田の同意を得、ただし出資者の名が外部にもれないよう秘密裡に進められていた。ところが政教社の『日本及日本人』2月11日号掲載の「かぐはな」が、露骨に左右田、福田を嘲罵したため、新新聞への出資計画は頓挫したという内容である。

福田の『解放』契約の破棄には、この事情が背景にあるとも言われ、また福田にはある黎明会員の除名問題も控えていた。さらに、大庭の「福田徳三論」に反論した遠藤無水⁴⁶⁾によれば、契約破棄の前日に『中外』の内藤民治が福田を訪れ、人事に関し堺についてこぼしたということもあった。今日では著作権上許されないが、大庭は4月19日付の福田から大庭宛の手紙を「『福田徳三論』について」に掲載した。福田は、労をとってくれた大庭に対して殆ど顔を合わすことができない、罪は一に福田にあり、『マルクス全集』は一時中止するも是非やりたい、今回の経験で自分は空論以外の能力なきことを自覚した、自分は堺の不信を鳴らすものであるが、全人格としては堺に信服しているとある。菊池城司はこれを受けて、“福田の失敗は「空論以外」のところのりだしたためらしい”⁴⁷⁾とする。

福田にとっては、元来取り組みたいと思っていた『資本論』や『マルクス全集』の話で乗気になったが、堺・山川側には高島との関係が悪化していた事情もある。官憲の弾圧の話が上がると「そんな時は乃公がフロックコートで談判に出かける」と強がりを見せたものの、考え直してみると、もともと新雑誌への執筆は気が進まなかったのに、主筆ともなると研究・教育にも差し障りが生ずる、しかも黎明会活動も控えている。人格的には魅力を感じるが、主義が異なる人物との共同作業・人間関係は容易なことではない、トラブルが生じるのは眼に見える、自分の立つべきところは、やはり学問・教育の場と思に至る。あくまで推測に過ぎないが、こうした諸々の複雑な思いを抱え、福田は破談のきっかけを、堺に一方的にかぶせ、いわば堺をスケープゴート(生け贄)としてしまったのではなからうか。

福田は、『解放』⁴⁸⁾創刊号(T8.6.1)へは、「解放の社会政策」と「斯の如くんば山東は支那に引渡すべからず」を寄稿した。

この事件後、さらに堺をして福田の人物観を覆すような事件⁴⁹⁾が重なり、ついに堺は「福田時代より河上時代へ」(『改造』1(9):階級闘争号:T8.12.1 70-75頁)⁵⁰⁾を執筆するに至る。

8. 堺「福田時代より河上時代へ」

堺は、我が国の思想界において、“福田博士の時代が過ぎて河上博士の時代が来た。大正八年の前半は福田時代の全盛期で、河上時代の醗酵期だった。そして其の後半は河上時代の興隆期で福田時代の衰亡期だ”と宣言し、その理由として社会主義に対する両者の立場をあげた。

堺は、福田の立場の背後に江戸っ子の俠気と野次性を見、“江戸児として頗る愉快な所のある

人物に相違ない。然し彼には堅実性が足りない。持続性が足りない。周囲の事情の為には軽々として容易に其心を変ずる人だ。謂ゆる気の変る人だ、アテにならない人だ。……彼の議論の矛盾と不徹底とは当然であつて、それ以外には何等の信念も覚悟もない事が分る。……社会主義の同情者若しくは利用者たる事は、今後も矢張り変わらないだらうが、其の正面の主張者及び信奉者にならない事は確からしい。若し後者になる場合があるとすれば、それは社会主義が余ほど優勢になつた時だらう。”と批判した。一方、河上肇自ら刊行する『社会問題研究』第9冊(T8.10)の「福田博士の社会民主主義を評す」の福田批判に、河上の大いなる進歩を認め、さらに河上が階級闘争を必要と認める態度が鮮明になったことを喜ぶ。“私の団扇は河上君の方に拳がつてゐるに極つている”⁵¹⁾。

吉野作造は、『何某の時代』とは何の故ぞ(『中央公論』35(1):378:T9.1)に、“……時代の変遷は人にあらずして根底の思想其物である。……今日は果たして何人の時代か、心ある者は恐らく其判断を誤らぬであろう。”と堺の福田・河上論に対する疑義を述べたが、福田自身の堺に対する反論はなかった。のちに、大内兵衛は、福田、河上に対して正面から社会主義をつきつけて論争したのは、日本社会主義のベテラン堺枯川であつた⁵²⁾と評した。

9. 『資本論』の翻訳および『マルクス全集』刊行について

1916(大正5)の春、小泉信三が留学から帰り、福田を訪問したとき、福田は、“この間、堺(利彦)が尋ねて来て、高島素之⁵³⁾という若い男を連れて来て、これが吾々の仲間(マルキストの仲間)で、兎も角も原文で資本論を通読したということになっているのです、と言っていた。なんでもドイツ語はオットオ会話文典(といたか、ジャアマンコオスであつたか)で独りでコツコツやったのだということだ”⁵⁴⁾と話した。高島は英語、ドイツ語と一つずつ順々に征服、“本を読みかけたら、飯を食ふと小便に行くとの外、五時間でも六時間でもブツづけにかじりつく”⁵⁵⁾タイプであつた。翌年、高島はマルクスの説に基づいて福田批判を展開した⁵⁶⁾。

1918(同7)年はマルクス生誕100年にあたり、福田はその記念として、『国民経済講話』坤『労働経済講話』を上梓してマルクスの評論に当てる一方、『マルクス全集』⁵⁷⁾の編集・刊行に向けての準備も進めた。坂西由蔵(神戸高等商業学校)、大西猪之介(小樽高等商業学校)、寺尾隆一(大阪高等商業学校)の協力を得、また、東京高等商業学校からは大塚金之助、金子鷹之助、左右田喜一郎、慶応義塾からは高橋誠一郎、野村兼太郎も参加し、福田は校註者の立場であつた。

翌年10月には『読売新聞』紙上に『マルクス全集』刊行予定が掲載され、福田は「マルクス全集ノ刊行ニ就テ」(『国民経済雑誌』27(5):T8.11)を發表。出版元の大鐘閣は12月20日の特典購読申込期限にむけて『マルクス全集内容解説』を作成し、その中で福田は「書物に於ける索引の必要」を執筆した。しかし、高島訳は福田の意にそわず、また、両者の意見も合わず、ついに福田は『資本論』第1巻(T9.6)を出したのみで、高島と決別し、結局福田門下は全部やめることになった。当時、福田が別に作っていた校註の原稿は、関東大震災のため焼失した。

その後、高島は独力で『資本論』全3巻を完訳し、1924(同13)年大鐘閣、而立社から出版した。しかし、福田も指摘した通り、あまりにも原文に忠実で文章として分りにくかつたため、翌

年10月から一年かけて新潮社から改訂全4冊を、さらに改造社から1927-28(昭和2-3)年に改訂全5冊を刊行した。“福田博士の計画は、日本に於けるマルクス全集の最初の計画で、それは遂に不成功に終わったが、然しそのお蔭で高島素之氏の『資本論』の全訳が出来上がったのである”(『河上肇全集』24 岩波書店 1983 85頁)。

高島は『資本論』完成後も国粹的傾向を強め、堺は、“然し私としては資本論の反訳を完成した、マルクス学の大功労者が、遂に自ら純正のマルキストであり得なかった事を幾ら憾んでも憾みきれない”⁵⁸⁾と嘆いた。

10. 大杉榮と関東大震災

堺と福田は、1921(大正10)年7月26日のパートランド・ラッセル⁵⁹⁾ 会見式で会っている。大杉榮⁶⁰⁾と福田は盛んにこの遠来の客と会話を交わした。“彼[大杉]のフランス語の確かな事は、すぐに我々同志の間に知られてゐた。もちろん英語も一通り出来てゐた。エスペラントが我々の間にはやはりはじめた時、彼は最も早く、そして最も深く、それに通じ、黒板勝美君等と共に、日本エスペラント協会の創立者の一人であつた”⁶¹⁾と堺が評するように、語学特にフランス語に堪能な大杉は、やはり語学に秀で、フランス語ができた福田に親近感をもっていたのではなからうか。1922(同11)年3月1日、神田の青年会館において過激社会運動取締法反対演説会が開催され、福田は新法案がいかにか時代錯誤であるかを演じたが、“説く所は経済に法律に或いは社会制度に広く深く学究的であつたためか、聴衆はポツリポツリと立ち掛ける。この時大杉氏は突っ起って「諸君、学者に敬意を表するため謹聴し給え」と怒鳴る”(『東京朝日新聞』T11.3.2)という記事にもそれが現れている。

1923(同12)年9月1日の関東大震災において、大杉は伊藤野枝らと共に官憲に虐殺された。その時福田は箱根において『流通経済講話』を執筆中であった。福田はさつま芋と一瓶の水とで徒歩と露営の四日続け、小田原、横浜、東京の惨状に茫然自失したが、すぐさま東京商科大学生を率いて罹災者調査にとりかかり⁶²⁾、また改造社呼びかけの震災復興会合‘二十三日会’⁶³⁾に参加した。大杉の虐殺を知り、9月26日「虐殺者とその曲庇者、讚美者」を執筆し、『改造』10月号が掲載。伏字が多かったが、事実の真相の一日も早い報道を知る権利があることを訴え、故なく人の命を断つた者を礼讃する陸軍、憲兵隊の人々を批判した。この事件は、『時事新報』が9月20日号外で流して即発売禁止、陸軍の発表は9月24日、その他の新聞社の対応もそれ以降であったことからすると、福田および改造社の反応は早い。

一方、この関東大震災、大杉榮虐殺の時、堺は第一次共産党事件に連坐して、幸徳の大逆事件の時と同じように獄中であつた。堺と大杉の出会いは1904(明治37)年3月、ときに堺は35歳、大杉20歳。堺は、“大杉がやられた”という報道に接したとき、いきなりうしろから頭を三つ四つ、樫の木の棍棒か何かで、続けざまにどやしつけられたやうな打撃を感じた。……率直に云ふと、私は近年、大杉君と余り善い交りではなかつた。主義の争ひ、態度の差異、それから生じた種々なる個人的反感、凡人にも英雄にも免れがたい幾多の弱点が我々の間に暴露されてゐた。然し今この大變の前にそんな事が何だろう。……大杉君と私との交りは殆ど二十年の歴史を持

つている。…… 狭い友人知人の間に於いても、広い社会公衆の前に於いても、二人の関係は既に切つても切れないものになつていた。…… 大杉がやられたのは、即ち私がやられたのである。少なくとも私の肉体の一部がやられたのである。まつくらがりの中に転がって見える数個の屍体の中、その一つはとにかく自分であるかの如くに感じた”⁶⁴⁾。

堺が大杉との余り善くない交わりで感じた事柄は、福田に対しても大方当てはまるであろう。しかし、労働運動の有力な一部が亡ぼされることは、直ちに自己の肉体を切り取られることを意味する‘肉体連結の感’とはならなかったし、またなりえなかった。

福田は、復興経済の研究に取り組む一方、1924 (大正 13) 年 4 月帝国経済会議議員に選ばれ、中央職業紹介委員会委員、内務省社会局参与、人口食料問題調査会人口部委員として政策立案に関与し、住宅問題に関する立法改正や職業紹介国営にこぎつけた。こうした福田の動きは、堺等にとっては体制側にまわったように映ったであろう。

保釈後の堺は健康を害していたが、国民新聞社を追われた徳富蘇峰の慰安会 (昭和 4 年 1 月 21 日) および改造社十周年記念会 (同 4 月 10 日) において福田と席を共にした。しかし、二回とも言を交える機会はなかったという⁶⁵⁾。

福田は翌年の昭和 5 年 5 月 8 日、堺はその 3 年後の昭和 8 年 1 月 22 日永眠した。

11. おわりに

第一次世界大戦後の社会状況の変化は大きく、普選運動が起こり、労働運動も盛んになった。『中外』が破綻し『解放』がそれに代ろうとした時、堺は福田と手を組みたいとどんなに願ったことだろうか。保守層にもリベラルな層にも通じる福田と一緒にいたら、官憲の圧力から逃れ、経済的に安定し、新しい支持層、読者層を広められよう、何よりも学問的なバックグラウンドを得ることになる。しかし、実現しかかった新雑誌の計画も、『資本論』、『マルクス全集』の共同作業も破れてしまった。東京大空襲で焼失したと伝えられる福田の日記が残存していたなら、堺等との事柄について、どのように記載されていたことであろうか。

福田は現実問題にコミットすることを求め、学問界から社会に打って出た。しかし、自由主義や社会と国家の関係を視野に入れた福田の社会政策、福祉政策、労働運動等の言論は、階級闘争をあくまでも主張するマルクス主義者にとっても、また保守層にも、さらに次世代の学者層にも、優れた問題提示にもかかわらず、その先駆的なるがゆえに、“彼の主張は社会的支持を受けることはなかった”⁶⁶⁾。また、“福田の思想が体系的に精緻化するにともない、それと時代状況の距離はかえって広がってゆくという痛ましい乖離が生じた”⁶⁷⁾。

二度目の渡欧 (1925-26) 以降、福田は‘物の経済’に対して‘人間の経済’を目指す厚生経済学⁶⁸⁾の確立に向けて専念していったのである。

注

- 1) 図書、雑誌の刊年に関して、明治はM、大正はT、昭和はSであらわした。
- 2) 福田の言論の引用には「」、福田以外には“ ”を使用した。
- 3) 引用文は、旧漢字は新漢字に改めたが、仮名遣いはそのままとした。
- 4) 書名および誌名には『 』を、論題には「 」を使用した。

論註

人名の説明には、『岩波西洋人名辞典』増補版、『コンサイス日本人名事典』改訂新版（三省堂）を参考にした。

- 1) 明治38年夏に『資本論』を読了した福田は、マルクスの器械的な交換価値論に感服できなかったが、マルクス主義の学理的研究を包括的に展望した最初期の「社会主義研究の栞」（『慶応義塾学報』111：M39.11）から晩年までその研究を続けた。批判ばかりでなく、マルクスが経済発展の真意を喝破したとする（『続経済学講義』第1編 大倉書店 T2 42-43頁：『経済学全集』第1集「経済学講義」745頁）などにも、評価の一端が表れている。マルクス評論には『労働経済講話』（『国民経済講話』坤前冊 佐藤出版部 T7）など、アジア社会論研究には『唯物史観経済史出发点の再吟味』（改造社 S3）がある。“福田はマルクス経済学者にはならなかったが、マルクス経済学の問題提起を日本に紹介した1人となった。”（池尾愛子『日本の経済学：20世紀における国際化の歴史』名古屋大学出版会 2006 84頁）
- 2) 本名伝次郎。高知県中村で自由民権思想にふれ、1888（明治21）年中江兆民（1847-1901）の学僕となり中江の思想・人格に感化された。1898年『万朝報』の論説記者となり、内村鑑三（1861-1930）らと理想団を結成、また1901年中江正造（1841-1913）の依頼に応じ足尾鉍毒問題打開のための直訴文を起草。堺らと平民社を創設し『週刊平民新聞』発刊、日露戦争開戦後も反戦の論陣を張る。1905年同紙は廃刊され、その筆過事件で入獄。出獄後アメリカに渡り、アナキズムに傾倒。帰国後、日本社会党第2回大会で直接行動論をかけた、片山潜（1859-1933）ら議会政策派と対立。堺らと金曜会を結成して社会主義講演会を組織。1909年菅野すが（1881-1911）と『自由思想』を創刊。1910年大逆事件に関係ありと検挙、起訴され、天皇暗殺計画の首謀者として1911年1月24日処刑された。
- 3) Lujo Brentano, 1844-1931 ドイツ新歴史学派の経済学者。ドイツ社会政策協会の設立（1873）を指導す。労働者の組合結成の権利を認め、労働保険、工場法による労働保護の必要を主張。*Die Arbeitergilden der Gegenwart*. 2v. 1871-72（邦訳『現代労働組合論』）などを著す。福田のミュンヘン大学留学時代、経済学を指導し、卒業論文を *Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*, Cotta, 1900（邦訳『日本経済史論』）として出版させた。福田との合著に『労働経済論』（同文館 M32）がある。福田は多大な影響を受け、帰国後ブレンターノ先生の名を事ある毎にあげたので‘ブレンターノキ’とあだ名された。福田は『経済学全集』（同文館 T14-S2）を出版して恩師の蔵書購入資金にあて、福田文庫を構成した。現在、同文庫は大阪市立大学学術情報総合センターが所蔵。
- 4) 明治40年2月9日、福田は日本の好況や足尾銅山の暴動を伝えると共に、1月15日再興の『日刊平民新聞』の切り抜きを同封した。それは以下の‘Socialist Daily in Japan’の英文記事であろう。『日刊平民新聞』*The Heimin Shimbun* は天下に向かって社会主義的思想を弘通するにあり、世界における社会主義的運動を応援するにあるという「宣言」を掲げ、右下欄に‘Socialist Daily in Japan’の題を付して、“Socialist movement in Japan has last achieved such a development as to have a daily paper. ... *Heimin Shimbun* means proletarian’s paper.”と記す。シカゴやフランスの社会主義紙も苦闘しているが、我等の新聞はそれ以上の厳しいものがある。我等の新聞は国内の商業主義や世俗主義の他紙に抗し、“We have only to march through under the red flag of socialism.”と謳い、Sanshiro Ishikawa, Kojiro Nishikawa, Kaneshichi Takenouchi, Denjiro Kotoku, Toshihiko Sakaiの発行者名を記載した（以下省略）。なお、竹内兼七は弘前在住の同紙発行の資金提供者である。
- 5) 小泉信三（1888-1966）は、慶応義塾での福田の授業が最初政治科であったため、理財科ではなく政治科に進学、先輩の高橋誠一郎（1884-1982）と共に受講した。福田の自宅での千駄ヶ谷読書会（アダム・スミスの『国富論』輪読会）にも出席、福田の勧めで1913年『ジェヴォンズ経済学純理』を翻訳、出版した。福田の序文の一節「小泉信三君は慶応義塾が近年に於て産出したる麒麟児の一人なり」は夙に有名である。のちに慶応義塾塾長。著作は『小泉信三全集』（文芸春秋 S42-47）にまとめられた。

- 6) 福田は、幸徳秋水著の『基督抹殺論』の末尾に「堺」の印が押してあるから、本から上がる収益はいずれ死刑に遭った人のため何かになるのだと思って余計に買った、死刑の一人森近運平は福田の『日本経済史論』を読んで、従来歴史に偽りのある事を知り、段々研究して遂に皇室の尊厳を否認するようになった、森近は度々福田に手紙をよこしたなどと話した（『青年小泉信三の日記』慶応義塾出版会 2001 25頁）。
- 7) 社会政策学会は第1回大会（明治40）から第18回（大正13）の間に、工場法と労働問題、関税問題、移民問題、市営事業、労働保険、生計費問題、労働争議、小農保護問題、税制問題、官業及保護会社問題、小工業問題、婦人労働問題、労働組合、中間階級問題、賃金制度並に純益分配制度、小作問題、労働組合法を討議した。同学会は“日本の社会科学が「国家」から「社会」へと重点を移すなかでの過渡的な組織であった。”（八木紀一郎『近代日本の社会経済学』筑摩書房 1999 148頁）
- 8) 当時、生存権に言及したのは、福田と牧野英一東京大学教授（刑法学）である。牧野は福田の極窮権を緊急権と称した。福田は生存権を労働権などと並ぶ社会権の一つと見、極窮権と営生権が生存権を支えるとした。生存権を基礎とする福田の社会政策思想は、“学問的生涯を貫く熱烈な主張であり、労働生活者厚生のための闘争”であった。（赤松要「社会政策の古典的名著」：板垣興一編 福田徳三『生存権の社会政策』講談社 203頁）
清野幾久子は、現日本国憲法中の生存権は、“戦前の大正デモクラシー期においては、福田徳三の人柄や思想、いろいろの場での発言は世の中になりに普及して、いわゆる知識人の中には生存権の思想がかなり広まっていた。そういう蓄積の上に、憲法定定過程で生存権を入れるという考えが出てきた”（内橋克人、清野幾久子「福田徳三に学ぶ」：『世界』2013年4月号 175頁）という。また、内橋は“日本国憲法の中で最も重要な、しかも未来につなぐべき理念は生存権だと思”うと発言（同頁）。
- 9) 日清戦争時に「君死にたまふことなかれ」とうたった与謝野晶子は、シベリア出兵に関し「何故の出兵か」（『横浜貿易新報』T7.3.17）を載せ、いかなる口実の下においても戦争は平和の破壊であり、正義人道と矛盾するという、福田の「何の為に戦ふか」（『太陽』同年3月号）中の文を引用し、“私は福田博士と全く同じ考えを戦争の上に持っております”と記した。福田は「自主的出兵よりも自主的平和」（『中外』T7.9）なども著わす。
- 10) 福田はアメリカのウィルソン大統領の唱える帝国主義、覇権主義を激しく批判した。一方、吉野作造はアメリカ、イギリスへの協調主義をとった。福田が戦後無視され忘れられたのに対し、吉野が今なお高い評価を得る理由の一端は、“日本におけるこの戦後国際政治の基本姿勢にあるとあってよいだろう。”（山内進「福田徳三の国際政治思想」：『一橋論叢』132(4)：H16.10 67頁、同著『文明は暴力を超えられるか』筑摩書房 2012所収）
- 11) 黎明会は1918（大正7）年12月23日創立総会を経て、翌年1月18日に第1回黎明会講演会を開催、記録は『黎明会講演集』、次号から『黎明講演集』。大正9年8月解散まで、福田は第1回「国本は動かず」、第2回「世界を欺く者は誰ぞ」、第3回「如何に改造するか」、第4回「黎明と啓蒙」、大阪講演会「文化と軍備」、第5回「エホバとカイゼル：国本開明の第一義」、第6回「朝鮮は軍閥の私有物に非ず」、第7回「労働団結権及同盟罷工」、第8回「言論自由の発達」を講演した。
この黎明会運動に絡み、福田の人物評価が『中央公論』や堺の『新社会』に掲載された。
- 12) 『復興経済の原理及若干問題』同文館 T13、『経済学全集』第6集4所収、復興事業の第一は人間の復興と主張した。
- 13) 中山伊知郎「福田博士の経済学」（『中山伊知郎全集』17：S48 551頁、初出「三田評論」676：S43.11）
- 14) 『万朝報』は‘よろず重宝’のシャレから命名された。1892（明治25）年11月1日黒岩涙香（1862-1920）が朝報社（のち万朝報社）から発刊。日露戦争開始当時は黒岩も非戦の立場にあったが、主戦論が主流になるとそれに転じ、内村、幸徳、堺の退社を招いた。
涙香は名文家として知られ、福田は黒岩の「乃木將軍の自殺を聞きて」（『万朝報』6882：T1.9.2）に讃嘆し、「生涯にタッター一度でいい。ああいう名文を書いてみたい」と言った。（野依秀市『明治の人・大正の人・昭和の人』実業之世界社 S43 156頁）
- 15) 『週刊平民新聞』（平民社）は大塚駅近くの幸徳の借家を拠点にM36.11.15発刊、第64号（M38.1.29）終刊。平民主義・社会主義・平和主義を巻頭の「宣言」に掲ぐ。第53号（M37.11.13）には創刊1周年記念として、マルクス、エンゲルス共著『共産党宣言』（1848）の英語版（*Manifesto of the Communist Party translated by Samuel Moore in 1888*）から幸徳、堺の共訳を掲載した。

『日刊平民新聞』（M40.1.15）は、幸徳、堺の非キリスト教系、石川三四郎、西川光次郎のキリスト教系の社会主義者が再結集して刊行し、第75号（同4.14）で終刊。

堺の書いたものは“秋水に比べて平易で啓蒙的であるばかりでなく、時としてユーモラスである。平民新聞がひたすら堅いばかりでなく、結構楽しい読物になっているのは、枯川の編集力なのではないだろうか。”（瀬戸内晴美「丹念なアルバム」：『堺利彦全集』月報 No.5 法律文化社 1971.6 4-5頁）

- 16) 山川均（1880-1958）は、同志社大中退後、明治39年日本社会党結成に加わり、『日刊平民新聞』の編集に従事。大逆事件後、郷里岡山に退くも、大正5年堺の売文社に入り『新社会』を編集。同11年日本共産党創立に参画、理論的指導者と目された。
- 17) 堺利彦のすぐれた伝記であり、それまであまり取り上げられなかった売文社の実像を明らかにした『パンとペン：社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』（講談社2010）の著者黒岩比佐子は、「売文」と「売文業」について、発想のヒントの可能性があるのが尾崎紅葉の硯友社の社則であること、巖谷小波や芥川龍之介の文例を引き、当時の文士の間ではこの二つはずっと関心事であったことを調べ、“それに先鞭をつけた人物、「売文社」を設立して、「パンを以てパンを求める」ことを高らかに宣言したのが、堺利彦だったのである”（218、222頁）。売文社は“現在の「編集プロダクション」の先駆的なもので、おそらく日本初の「外国語翻訳会社」、日本語では「売文社」だが、英語の社名は「リテラリー・エージェンシー（Literary Agency）」で、山川均によれば「文筆代理業」である。そこには「売文」というニュアンスはない”（14頁）と記す。
- 18) 『堺利彦全集』4 中央公論社 S8 荒畑寒村「巻末に記す：第四卷解説」546頁
寒村は続けて、“実に当時に於ける先生の心境なり態度なりは、風の吹き荒ぶ暗夜の遠野原を、独りして微かな火種を吹き吹き歩いて行く旅人のやうだつたとも云ふべく、同盟半は散じ、半は枯骨の嘆に堪へなかつたであらうと思ふ。然しさう云ふ逆境悲運に際してこそ、先生の性質の特長が最もよく發揮せられるのであつて、天を楽しみ命に安んじつつ、一步一步、圧迫の緩むに従つて伸ぶると云ふ風であつた。……熱狂したり焦燥したりもせぬ代りに失望したり気落したりもせず、難境に処して悠々たる態度を失はず、徐ろに時の来るを俟つの覚悟と堅忍とは、操守堅固の士に非ざれば容易に能はざる所である”と記す（546-547頁）。
- 19) 堺は、幸徳らの死刑執行（1911.1.24）の“翌日から遺体の引き取り、遺品の処理に奔走し、2月から3月にかけて、刑死者の親戚縁者・知人同志たちとの通信や面会を含めて、あと始末に忙殺された。”その後70日かけてその家族を慰問する旅に出かけ、旅費は300円近くかかったが、京都の岩崎革也の援助によるという。（小山仁示『『丸い顔』をめぐって』：『堺利彦全集』月報 No.5 1971.6 1頁）
- 20) 松尾尊兌「大正デモクラシーと堺利彦」（同上月報 6頁）
- 21) 堺利彦「福田時代から河上時代」（『改造』1（9）：T8.12） 70頁
- 22) 経済学座談会：「現代の経済」2：S12.12 16頁 小泉信三発言。
“其時色々の質問があって、堺利彦充分に答へることができなくて、此次には幸徳をお呼びください。幸徳は私よりもよく調べていると云ふようなことを言つて居つた。”という高橋誠一郎の発言もある。
なお、高橋は、大逆事件号外を見た福田の反応に就いて述べ、また、堺の理財学会講演は大逆事件の少し前、講演から間もなく大逆事件が起こつたと発言しているが、大逆事件の2年前に堺は入獄しており、この少し前、間もなくの表現はいまいである。
- 23) 堺利彦「俠気と野次性の限度」（『祖国』S4.7） 52頁
“今から二十数年前、私は慶應義塾の何とやら会に招かれて、社会主義に関する講演をやつた事がある。兎にかく大学と名のつく処に呼ばれた事は、私として初めてであつた。跡で聞いた所に依ると、それは当時、その教授であつた福田君の、一種の好奇心の発露であつた。”車中の福田の発言も同頁。
- 24) 『東京経済雑誌』第1381号（M40.3.30） 530-532頁
さらに福田は「難解なるカール・マルクス」に註をつけ、カウツキー原著、高島素之訳『マルク資本論解説』（T8.5）についての序とした。
- 25) 平民社は『週刊平民新聞』創立1周年記念に、第53号（M37.11.13）全紙を費やして『共産党宣言』の邦訳を掲載したが、直ちに禁止起訴された。『共産党宣言』や『資本論』の名は幾度も同紙上で紹介してきたが、誰もまだ本当に読んでいなかったため、この翻訳を発表することは、“実に愉快であり、光栄で”、平民社の運動が初めてやや本物になったとした。幸徳と堺の二人ともドイツ文に通じなかつたため、英訳によって重訳した。訳者自身が自覚していたとおり、誤謬は少なからず、また第3章を欠いていた。発行の即日、禁止となつたので、ほとんど人の目にはふれなかつたが、月刊雑誌『社会主義研究』（M39.3）には“全文チャ

ント載つ”た。この時は幸徳がアメリカへ行ったため、堺一人で第3章を反訳した。〔『堺利彦全集』6 中央公論社 S8 283-284、542-543 頁〕

福田は、『時事新報文芸週報』165号 (M42.7.7) の‘内外百書選定’と題するアンケートに、アダム・スミス『国富論』やダーウィン『種の起源』などのほかに『共産党宣言』をあげた。「邦訳あり、猶資本論は専門家以外には分り申間敷、又決して一般に必読と云ふ可き性質にあらず」と注をつけ、『資本論』よりも『共産党宣言』を「どんな人でも一度は読んでもらいたいもの、自分が通読して人に薦めるに大丈夫と確信したもの」として推薦した。

- 26) 大逆文庫は堺利彦の旧蔵書。堺は幸徳らが処刑された後、彼らの所蔵する図書や雑誌を譲り受け、時の権力への怒りと抗議の意を込めて「大逆文庫」と命名し、売文社において大切に保管してきた。縦4.2cm、横1.7cmの朱印「大逆文庫」の捺印がある。その後、向坂逸郎の蔵書として向坂文庫に収蔵され、現在法政大学大原社会問題研究所にある。(参考：吉田健二『大原社会問題研究所雑誌』no.494・495：創立80周年記念号：2000.1 95-96 頁)
堺はまた、大逆事件の犠牲者の“獄中書款を貼りつけた「大逆帖」を作成して、それらが散逸するのを防いだ。”(黒岩比佐子『パンとペン』234 頁)
- 27) 『売文集』は、堺の序、「巻頭の飾り」(六十二名家の寄稿)、第1篇：剣と針、第2篇：露と雫、第3篇：「喜劇 谷川の水」(パーナード・ショー作)、第4篇：未来と過去(大杉榮、荒畑寒村、高島素之らの作品を含む)からなる。
なお、丙午出版社の高嶋米峰(1875-1949)は、明治・大正期の仏教運動家、仏教、哲学書を出版。『売文集』は『堺利彦全集』第4巻(中央公論社 S8、法律文化社 1970)に収録されたが、「巻頭の飾り」は、わずかに各々第6巻に引用されているに過ぎない。1985年不二出版復刻の『売文集』は全部を収録する。
- 28) 他に、石川半山、山口孤剣、中里介山、石川三四郎、島村抱月、岩野泡鳴、黒板勝美、徳富健次郎、木下尚江、西川光次郎、田岡嶺雲、野依秀一、高嶋米峰、暁鳥敏など、ジャーナリスト、文士、史家、法律家、社会主義者など多士済々、“.....君の文は、洒落にして熱あり火あり、滑稽にして血あり涙あり。売物と雖も一山百文の出来合に非ず。.....”(松本道別)、“.....君の欠点は之を一語にして言へば其円なる所にある。円とはマルイのである。角が無いことである。.....我の極めて強烈な円である。”(石川三四郎)、“純文学者としての堺は殆ど重きを置くに足らぬ.....然し翻訳家としての彼は確に卓抜な技倆を有して居ると思ふ、一般は余り認めぬかも知らぬが一種流暢温雅な筆を以て早くよりゾラやショーを紹介して居る事だけでも文壇に於ける寄与は大なりと思う。.....”(守田有秋)、“我が堺枯川君は、赤裸の人、赤誠の人、而して又赤貧の人、裸体で物は落さじ、往け、露堂々として往け、人は朧月をのみ愛づるものかは”(加藤咄堂)など、それぞれ思うところを記す。
- 29) 福田には野依秀一(のち秀市)を通して頼んだ(野依秀一『人物は躍る』秀文閣書房 S12 65 頁)。
- 30) 菊池城司『近代日本における「フンボルトの理念」—福田徳三とその時代』広島大学大学教育センター 1999 112 頁
- 31) 野依秀市 前掲『明治の人・大正の人・昭和の人』186 頁
- 32) 堺の「日本社会主義運動小史」(『堺利彦全集』中央公論社、法律文化社とも第6巻所収)によれば、当時の『新社会』には高島、安成貞雄、安成二郎、白柳秀湖、石川三四郎、山口孤剣らが主として執筆、アメリカ在住の片山潜、岡山在住の山川均が寄稿。T5.1には山川が上京して売文社に入り、青山(のち山川)菊枝が参加した。T6には発禁処分が続いたが、7月組織変更がなされ、荒畑、堺、吉川、高島、山崎、山川、渡邊政太郎等七名の共同経営となった。しかし、内部の思想的論争が起り、一時売文社(堺、山川、高島の合名会社)の手に戻ったが、山川等の不在中、高島派によって協調的、保守的、反動的傾向が顕著になった。その結果 T8.3 堺等は遂に売文社を解散し、高島等と分離した。T8.5『新社会』は、新たにマルクス主義を旗印として再発行したが、T9.1に『新社会評論』となり平民大学から発行された。
- 33) 堺利彦『新社会』2:T4.10 22 頁
- 34) 『新社会』1(1):T4.9 新社会社発行 16-23 頁、「新社会とは何ぞや」として、福田『黎明録』(T8.7)、同『経済学全集』第6集1 所収。
- 35) 『近代思想』3(1):復活号:T4.10 8-11 頁、田中惣五郎『資料大正社会運動史』上 三一書房 1970 101-102 頁に収録。
- 36) 内藤民治編著『堤清六の生涯』曙光会 S12 363 頁

- 37) 山川均『山川均自伝』 岩波書店 S36 356頁
- 38) 前掲 堺「狭気と野次性の限度」52-53頁
- 39) 大庭柯公「福田徳三論：対河上博士挑戦者」（『日本及日本人』759：T8.6.15） 82頁
- 40) 堺利彦「福田時代から河上時代」（『改造』1（9）：階級闘争号：T8.12.1） 71頁
- 41) 高島素之「老社会と黎明会」（『新社会』5（6）：T8.2） 6頁
- 42) 前掲 大庭柯公「福田徳三論」84頁
福田は“真正なる天プラを喰ふ会檄文”を知友の間に廻し、「純正な社会主義といふものがあるのに、国家社会主義などと云ふのは、鰻の蒲焼を更らに天プラにしたやうなもので、ヒツコクで喰われぬという意味で」、高島の変節を揶揄した。
- 43) 大庭柯公（1872-1924?）は、本名影秋、大阪毎日新聞社に入り、海外特派員として活躍、『外交時報』主宰を経て1914年東京朝日新聞社に転ず。1918年当時大正デモクラシーの先頭に立ってシベリア出兵や米騒動で寺内内閣を攻撃していた『大阪朝日新聞』の‘白虹事件’（白虹を貫けりの故事成句が兵乱が起る徴候を示すとして発行禁止処分）の余波を受け、東京朝日新聞社を退社。1919年雑誌『我等』発刊に参加、1921年ソ連に渡るが消息をたつ。
福田と接触した当時は失職中、新雑誌計画の挫折を記した「福田徳三論」（『日本及日本人』759）は、遠藤無水や樹陰童子らの反撃・攻撃を受け、釈明文ともいべき「『福田徳三論』について」（『日本及日本人』762：T8.8.1）を掲載した。
- 44) 山川均「大庭柯公さんと私」（同著『からす：随筆集』日本評論社 S10所収）、田中真人『高島素之：日本の国家社会主義』現代評論社 1978 167頁
- 45) 福田はこの年の5月1日付で東京高等商業学校教授に復任したが、大庭は「福田徳三論」の中で、文部省が福田に東京高等商業学校教授高等官三等の叙任の内談を持ち掛けたことを福田の変節の理由にし、堺も「狭気と野次性の限度」（『祖国』S4.7 53頁）においてそう言及した。後年、林尚男は『評伝堺利彦：その人と思想』（オリジン出版センター 1987 258頁）において“その筋の圧力があつたことは容易に想像のつくことである”とした。しかし、菊池城司は『近代日本における「フンボルトの理念」—福田徳三とその時代』において、文部省の任命は俗説の典拠となつたゆえに、大庭が仕組んだ福田に対する誹謗が“まことしやかに流布していった”と見、また大庭の文は“非常識な福田というイメージをつくりだすために意図的に書かれた文章であると考えるべきであろう”（114頁）と指摘、また林の説明も漠然としてリアリティに欠けるとした。
- 46) 大庭に対する批判には、『国家社会主義』7月号に寄稿した樹陰童子の「大庭柯公に与ふ」や遠藤無水（友四郎）の『『福田徳三論』を讀みて』（『日本及日本人』761：T8.7.15）などがあり、遠藤は福田がそれなりの理由があつて堺を悪罵したとする。遠藤はその時分は堺から離れていたが、売文社に在籍した経歴があり、同社の内部事情に通じていたことから反論したものであろう。
- 47) 前掲 菊池城司『近代日本における「フンボルトの理念」—福田徳三とその時代』 115頁
研究者、教育者については、『中外』の内藤民治は、「学者肌合の福田博士」（『祖国』S4.7 46頁）に、福田はどこまでも言論は言論、思想は思想とし、社会主義のような謂ゆる實際行動は極力避けていた、“自分は氏をどこまでも学者的範囲から脱しない一つの大きな頭脳だと思つてゐる。氏のライブラリーが図書館そこのけの豊富なるものであること、その膨大なる書籍の数々が決してツンドクだけでなく、可なり手垢だらけになつてゐることで、氏は正々堂々たる、学者らしい学者である”と記す。また、福田の晩年（昭和4）、千駄ヶ谷読書会などが係わつて福田宅内に書庫が完成した折、福田は感涙にむせびながら、「我は教育家なり、Captain of Industry を造ることが過去三十年忘るる日とて無き我が使命なり我が職分なり」と繰り返し言った（菅禮之助『福田先生の追憶』福田徳三先生記念会編・刊 1960 16頁）などからも、福田の自分が知られよう。
- 48) 『解放』は、“世界は改造せられんとす、新文明の燭光は輝き始めたり。解放の暁鐘は吾人の長夢を破れり、雑誌『解放』茲に於てか生る”ではじまる‘宣言’を巻頭に掲げて大錠閣から創刊。大正中期の盛んなデモクラシーの機運のもとに誕生し、“新時代の新人が総て悉く、伝統的、因襲的、保守的、反動的なる一切の旧思想より解放せられんこと”を使命・任務とし、最初から社会主義的な編輯方針を掲げて出発した。……黎明会同人の福田徳三、吉野作造、大山郁夫らを顧問格に置き、新人会メンバーが編輯に協力したから、初

期は『改造』よりも『解放』の方がはるかにラディカルだった。(小田切進編 改訂増補『現代日本文芸総覧』補巻 明治文献資料刊行会 H4 700-701頁)

- 49) “..... 或る日、忽然として彼〔福田〕の態度が一変した。彼は家の門前に立って居た処の、私の尾行巡査に聞えよかしに散々私の危険人物たることを罵倒して私と別れた。” (前掲『俠気と野次性の限度』:『祖国』S4.7 52頁)
- 50) 『堺利彦全集』4 法律文化社 1971 433-439頁所収
堺の福田に関する主な言論(年代順)は、「林氏の『新社会』」(『新社会』2:T4.10)、「国民経済講話」(同3(8):T6.4.1)、「日本に社会主義起こる乎:福田徳三氏の意見を紹介し且つ聊か之を批評す」(同4(5):T7.2.1)、「極窮権、緊急権」(同5(2):T7.10.1)、「日本思想界の動乱」(同5(6):T8.2.1)、「福田徳三君を評す」(『不平』T8.3、『新社会』6(1):T8.5.1に転載)、「一石二鳥の効果:福田博士の『解放論』および『資本論』を評す」(『新社会』6(4):T8.9.1)、「福田時代から河上時代へ」(『改造』1(9):T8.12.1)、「俠気と野次性の限度」(『祖国』S4.7.1)。大半が大正7、8年に集中する。
「俠気と野次性の限度」(同上 51-54頁)においては、現在執筆中の『自伝的にみた日本社会主義運動史』には自然福田との関係を書かねばならないが、福田を讚美したくもないし、さりとして余計な悪口(もしくは憎まれ口)を叩きたくもない。叩くなら、ずいぶん叩きたい気もあるのだが、としながらも、慶応義塾での講演、『日刊平民新聞』を発行したとき直接間接に援助してくれたこと、内藤民治の『中外』時代、そして絶交となった‘或る日’について記し、福田の俠気と野次性がいかに發揮されてきたかを述べた。
- 51) 福田と河上とのマルスク主義に関する学説の比較は、山川均も『河上福田問題』の総勘定(『改造』2(3):T9.3 56-70頁)、「個人の完成か組織の改造か:河上肇氏と福田徳三氏」(『雄弁』T9.4 春季増刊号掲載)上で客観的に論じた。2論文は『山川均全集』2 勁草書房 1966 360-372、141-147頁所収。
- 52) 大内兵衛『経済学五十年』東京大学出版会 1960 70-71頁
“福田徳三は社会政策学派の殿将であったが、また社会政策の革新家でもあった。..... 彼の社会政策論はだんだん形をかえて遂に労働権(ホジスキ)または労働全取権(アントン・メンガー)まで達したが、どうしても社会主義にならなかった。..... 河上さんは福田さんに比べるとセンチメンタルな悩み屋であった。そのなやみは人道主義から来るものであった。それで農本主義・儒教主義の間をいろいろに動揺しつつ、ついに社会主義に向かっていった。然し本来社会主義的でない性格の人であったから、なかなか社会主義になれなかった。こういう二人に対して正面から社会主義をつきつけて論争したのは、日本社会主義のベテラン堺枯川であった。”
- 53) 高島素之(1881-1928)は、同志者大学中退後『東北評論』を発刊して筆禍にあい入獄。その後堺の売文社に入り、反訳や文章代役にあたった。売文社はのち、堺・山川・高島の合名会社となり、高島は『新社会』の主な執筆者となる。大正7、8年頃から酒と講談を好み、上州長脇差の肌合いを示すようになり、社会主義から国家社会主義、国粹主義的傾向が濃厚となって堺らと対立した。(参考:『堺利彦全集』6 中央公論社 278-282頁、同 法律文化社 247-250頁)
- 54) 『小泉信三全集』14 文芸春秋社 S42 14頁、初出:『文芸春秋』S22.6
小泉は続けて記す。“それは..... 日本のマルクイズム研究の一つの里程を示していると思う。その後、福田博士が主唱して資本論共同翻訳の企てが起り、それが崩れて、結局高島氏単独で全三巻を訳し、再三改稿改版して最後に改造社の円本資本論となった。高島訳は今日から見て決して完璧ではあるまいが、訳者の力量、その時と手間とをかけた点からいって、わが邦の翻訳書中出色のものであったと思う。今後更に新しい訳本が出れば、或いは高島訳中の幾多の誤謬も指摘されるかも知れないが、その反面に、後の翻訳者が高島本中の幾多の適訳妙訳によって援けられるであろうことも忘れてはなるまい。”
福田はのちに、「私をして[高島]氏のマルクス研究に若干の御手伝を為さしめんとの一のみが堺老をして氏と私を結びつける労を執らしめたのであった。」と記した(福田「新刊鳥瞰記」:『改造』12(1):S5.1 144頁)
- 55) 同上『堺利彦全集』6 中央公論社 279-280頁、同 法律文化社 248頁
- 56) カウツキイ著、高島訳「資本論解説」(『新社会』33(11):T6.7.1) 54-55頁
- 57) 『マルクス全集』の企画にあたり、福田は河上肇、小泉信三、森戸辰男にも声をかけたが不参加。
なお、福田の没後、マルクス著、本多謙三との共訳「伯林大学時代父に宛てたる手紙」が、『マルクス・エンゲルス全集』21:書翰集(改造社 S6)に掲載された。

- 58) 『日本社会主義運動史話』：『堺利彦全集』6 中央公論社 281頁、同 法律文化社 249頁
- 59) Bertrand A. W. Russell, 1872-1970 イギリスの哲学者、論理学者、数学者。
 当日の様子については、“大杉氏との話の後に福田博士が入り込んで、「イギリスには今様な思想家はいない」と単刀直入、ラ氏莞爾として、「しかり」とこれも淡白である。ケエイの「講和の経済的効果」の批評からマルクスの「資本論」に移ったが、福田博士が高商で「資本論」を講義して居ると聞いたラ氏は意外だという顔附きで「オオ、ソウ。官憲は禁じないか」「日本は仲々開けて居るから、研究と宣伝とを一緒にしない」とどこまでも福田式を發揮……”（『東京朝日新聞』T10.7.27）。
 ラッセルは、氏が死亡したとの新聞誤報事件やジャーナリズムの対応、特高の尾行・監視などで日本に対して心証を書した。自叙伝において、“わたしたちがほんとうに好ましく思った日本人は、たった一人しか会わなかった。それは伊藤野枝という女性であった。彼女は若くそして美しかった。[以下、虐殺についてふれる]”と記す（『ラッセル自叙伝』Ⅱ 日高一輝訳 理想社 S46 175頁）。
- 60) 大杉榮 (1885-1923) 東京外国語学校 (現東京外国語大学) 仏語科出身。『平民新聞』読者となり、以後平民社の研究会に出席、1908年金曜会事件・赤旗事件で検挙され入獄。1912 (T 1) 年荒畑寒村と『近代思想』を刊行。サンジカリズム研究会を組織し、生の哲学、進化論、労働運動、無政府主義に関する著作・訳書を多く著し、『ファール昆虫記』も訳した。1918年伊藤野枝と『文明批評』、和田久太郎らと『労働新聞』を創刊。1920年日本社会主義同盟の発起人となり、1922年ベルリン国際アナキスト大会出席のため日本脱出、翌1923年フランスでメーデー集会に於いて演説、逮捕・追放される。同年関東大震災時の戒厳令下で憲兵大尉甘粕正彦らに伊藤野枝、甥の橋宗一とともに虐殺された。
- 61) 『堺利彦全集』6 中央公論社 268頁、同 法律文化社 237頁
 続けて、“彼は少々 (と云ふよりは、むしろ可なり) ドモリであった。昔エンゲルスは二十個国の語でドモつたといふ話があるが、大杉も後に、仏、英、エス、スペイン、イタリイ、ロシア等、六、七個国の語でドモルと云はれてゐた。”また、“幸徳秋水が大杉の才学を賞揚したついでに、かう云つた。大杉と話して居ると、対等の友人と、話して居るような気がすると。それほど彼は成熟してゐた。”
- 62) この時期の福田の活動については、拙稿「福田徳三とは—その人となり (3) 関東大震災をめぐって」(『評論』no.185: 2011.10 10-11頁) に記した。
- 63) 会名は福田が命名。同会では大杉事件につき三カ条の建議書を作成、32名の氏名を記して、総理大臣、陸軍大臣、戒厳司令官、軍法会議判士長に提出した。(『読売新聞』T12.10.5、『新聞集成大正編年史』大正12年下 138頁)
- 64) 前掲「日本社会主義運動史話」：『堺利彦全集』6 中央公論社 273-274頁、同 法律文化社 242頁
- 65) 前掲 堺「俠氣と野次性の限度」51頁
- 66) 67) 宮島英昭「1920年代初頭の“社会政策的自由主義”：福田徳三の「労働国家論」を中心として」(『社会経済史学』50(1): 1984 49-50頁)
- 68) 『厚生経済研究』上下 2冊 刀江書院 S5、福田の死の約2カ月前に刊行。
 山田雄三は、福田の厚生経済学について、“当時のマルクス経済学に対抗し、同時にピグー流の「厚生経済学」を乗り越えようとして、「人間の経済」の理論的開明に努められたのである”と解説する(福田『厚生経済』講談社 S55 229頁)。

